

原著論文 (Article)

総合的な学習のパターン化への危惧及びその解決に向けた考察

— 指導する教員の意識を踏まえた「総合的な学習」のリニューアルの試み —

Concerns about the patterning of comprehensive learning and consideration for its solution: A trial of renewal of “comprehensive learning” based on the consciousness of the teachers

相川保敏¹・鬼頭 稔²・左近妙子³

AIKAWA Yasutosi¹, KITOU Minoru², SAKON Taeko³

キーワード：総合的な学習，学習指導要領，教員の意識

Key words: Period for Integrated Studies, course of study, consciousness of the teachers

1. はじめに

2020年度，小学校では新しい学習指導要領（2017）が完全実施された。今回の改訂では、「生きる力」の育成を目指す各学校の特色を生かした社会に開かれた教育課程を実現していくために、「資質・能力の明確化」「カリキュラム・マネジメント」「主体的・対話的で深い学び」の重要性が掲げられている。その中でも，子どもたち自身が生活や地域社会における課題を発見し，探究的な学習を通して課題解決を図っていく「総合的な学習の時間」（以下，「総合的な学習」）は，「主体的・対話的で深い学び」を具現化しやすいだけでなく，他教科や他領域との関連や地域の特色を生かした教育課程に関与しやすいことなどから，その重要性は高まっていると言える。

「総合的な学習」は誕生から20年を経るわけであるが，当初は時間だけが設定され指導内容は学校にゆだねられた自由度の高いものであった。しかし，学習指導要領が改訂されるたびに学校で取り組むべき内容が明示され，今回の改訂により各学校は自校の教育目標を踏まえた「総合的な学習の目標」を設定し，その目標を実現するための全体計画・年間指導計画・単元計画を定めていくことが明記されている。したがって，各学校における「総合的な学習」の教育課程上の位置付けが確立していくこととなり，多くの学校では，例えば「3年生では6月に外部講師を依頼し，地域の伝統的なお祭りについての話をしてもらおう」というように学年，時期，活動内容，課題等が確定されていくと考える。しかし，こうした流れは，教科書もなく指導が難しいとされる「総合的な学習」では，計画に沿って前年度と同様の活動を行っていくことにつながり，子どもたちにとって切実な「課題」の解決でなく，教師が設定し計画に沿った「課題」の解決に向かっていくことが懸念される。「総合的な学習」が学校の定めた計画通り

に前年度と基本的に同じ活動を行う「パターン化」に向かう危険性をはらんでいると考える。

そこで，「総合的な学習」が誕生から現在に至るまでどのような課題をもち，どう対処されてきたのか，そして指導する教員にどんな意識を持たせてきたのかの整理していく中で，「総合的な学習」の教育課程が定まる今だからこそ改めて「総合的な学習」のマネジメントの在り方を考えていきたい。

2. 研究の方法

- (1) 学習指導要領の改訂に伴う「総合的な学習」の変遷と指導する教員の意識の変化を整理する。
 - ①「総合的な学習」創設期の教員の意識調査から課題を捉える。
 - ②2008年の学習指導要領改訂後の教員の意識調査から課題を捉える。
- (2) 現在の「総合的な学習」がはらむ課題について考察する。
- (3) 課題に対応した「総合的な学習」のあり方を名古屋市立白鳥小学校における取組から考察する。

3. 学習指導要領の改訂に伴う「総合的な学習」の変遷と教員の意識

3.1 「総合的な学習」の創設と教員の意識

「総合的な学習」は，1998年12月の学習指導要領告示により新設され，2000年4月より実施可能，2002年4月より完全実施された。新設された「総合的な学習」は，学習指導要領（1998）「総則」において，「自ら課題を見付け，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，よりよく問題を解決する資質や能力を育てること」及び「学び方やものの考え方を身に付け，問題の解決や探究活動に主体的，創造的に取り組む態度を育

¹ 相山女学園大学教育学部，² 金城学院大学，³ 名古屋市立白鳥小学校
2021年11月9日受付

て、自己の生き方を考えることができるようにすること」と示された。各学校は、学習指導要領の総則「第3 総合的な学習の取り扱い」を基に、まさしくゼロから「総合的な学習」を創り上げていったのである。

当時、相川が勤務していた愛知教育大学附属名古屋小学校(2000)では、人間性を育む教育課程の核として「総合学習(総合的な学習)」を生み出し、伸ばす力・授業の組み立て・評価の方法を明らかにするとともに、人間、健康、表現、環境、国際、情報など、様々な視点から実践を構築し、準備を進めた。また、2001年に転勤した名古屋市立城西小学校(2001)でも、完全実施に向け「コンピュータ操作技能習得と授業への応用」「地域を調べる学習」を「総合的な学習」の2本柱として指導計画・実践の積み上げを行った。特に高学年の「地域を調べる学習」では、学校区にある名古屋城を核として、5年生は堀川の歴史、水質調査等を行う「堀川を調べよう」、6年生は名古屋城の歴史、名古屋城を中心とした町づくり等を調べる「名古屋城を調べよう」といった探究課題を設定し、地域の特徴を生かした「総合的な学習」の教育課程を作成して、完全実施に向けた準備を進めた。どちらの学校でも、「総合的な学習」を創り上げるために多くの時間と労力を使ったことを記憶している。

この時期、各学校がどのようにして「総合的な学習」を創っていったのかについてはベネッセ教育総合研究所が行った第3回学習指導基本調査(2002)にその一端を見ることが出来る。この調査では、小中学校教員に『「総合的な学習」で実施していること』(「よくしている」と「時々している」の合計)を尋ねたところ、「児童・生徒にテーマを選ばせて行う学習」小学校81.1%・中学校82.3%、「児童・生徒にテーマを与えて行う学習」小学校80.2%・中学校72.6%、「コンピュータを使った学習」小学校84.0%・中学校69.0%となっており、多くの学校で2001年当時の城西小学校のように「テーマ学習」「コンピュータを使った学習」が積極的に行われていたことが分かる。しかし、この調査の段階ですでに、「教師の負担が増えた」「学習テーマの設定に悩むようになった」「教師によって負担の差が大きくなった」「具体的に何をどのように実施したらよいか悩んでいる」といった不安や負担の声が教員から上がっており、「総合的な学習」の「時数を減少した方がよい」「なくしてもよい」という意見が小学校64.0%、中学校74.2%と高い割合で表出していた。現場の教員は、困惑の中で「総合的な学習」に取り組んでいたことが窺える。

2003年の中央教育審議会答申(2003)では、「総合的な学習」に対して、創意工夫した授業計画の組み立ての機会が増加し、児童・生徒の学習意欲の向上などにつながったという肯定的な意見とともに、次のような課題が指摘された。

- ・教員の負担感、学習のテーマ設定の難しさ、具体的な実施内容に関する教員の悩みなどを考慮し、何らかの参考となる手引が必要である。
- ・学校において具体的な「目標」や「内容」を明確に設定せずに活動を実施し、必要な力が児童生徒に身に付いたか否かの検証・評価が十分行われていない。

2003年12月、学習指導要領の一部改訂が行われ、「総合的な学習」については、各学校における「目標及び内容の設定」「全体計画の作成」「児童生徒の学習状況に応じた指導」などが明確化された。

一部改訂後の2005年3月、文部科学省の委託でベネッセ総合研究所が行った全国調査「義務教育に関する意識調査」(2005)では、「総合的な学習」について「よいと思う」「とてもよいと思う」と「まあよいと思う」の合計(以下同じ)と答えた教員の割合は、小56.6%・中43.5%、教員全体で52.5%と半数近くが評価しているものの、「もっと国語や算数・数学など教科の学習を重視すべき」と答えた教員の割合は、小76.7%・中82.0%と高くなっている。そして、「なくした方がよい」の割合は、小38.8%・中57.2%で、「もっと充実すべき」の小31.5%・中30.1%を上回っていた。依然として、「総合的な学習」の目的や意義が浸透していないのが分かる。また、「教材作成や打ち合わせなど授業の準備に時間がかかり、教師の負担が大きくてたいへんだ」と答えた教員の割合は、小83.4%・中84.6%と大変高くなっており、教員の負担感の解消は進んでいないことも分かる。さらに、「教師の力量や熱意に差があり指導にばらつきが出る」と答えた教員の割合は小84.4%・中76.3%に達するなど、指導者の力量や熱意によって差が生じるという「総合的な学習」特有の課題も浮かび上がっていた。

しかし、その2年後に行われた、ベネッセ教育総合研究所の第4回学習指導基本調査(2007)では、小中学校教員に『「総合的な学習」の学習内容』を尋ねたところ、第3回調査(2002)に比べ「児童・生徒にテーマを選ばせて行う学習」は小81.1%→79.5%・中82.6%→74.0%と減少、「児童・生徒にテーマを与えて行う学習」は小80.5%→81.4%・中74.4%→80.1%と増加しており、各学校で取り組むテーマが少しずつ定まってきたことが推察される。一方で、「将来の進路や職業などの指導」「国際理解や英語にかかわる学習」「学校行事やその事前事後の学習指導」「教科学習の補充や補習」の割合が前回調査より増えており、学校現場では「総合的な学習」の本来の目的でない時間の使われ方が顕著になっていた。そして「総合的な学習」の「時数を減少した方がよい」「なくしてもよい」という意見も、小64.4%→68.7%・中74.8%→76.7%と前回調査より増加した。

「総合的な学習」が誕生してから10年、学校現場に「総合的な学習」の目的や意義は少しずつ浸透しつつも十分に理解されているとは言えず、教師の負担感も解消できていない状

況にあったと言える。

3.2 2008年学習指導要領の改訂と教員の意識

2008年1月17日、中央教育審議会は「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」の中で、「総合的な学習」について、次のような課題を指摘している。

- ・総合的な学習の実施状況を見ると、大きな成果を上げている学校がある一方、当初の趣旨・理念が必ずしも十分に達成されていない状況も見られる。また、小学校と中学校とで同様の学習内容を行うなど、学校種間の取り組みの重複も見られる。
- ・総合的な学習においては、補充学習のような専ら特定の教科の知識・技能の習得を図る教育が行われたり、運動会の準備などと混同された実践が行われたりしている例も見られる。

2008年3月に告示された学習指導要領では、「総合的な学習」の取扱いが大きく変わった。「総則」で扱われてきた「総合的な学習」が新たに章立てされるとともに、「目標」が示された。そして、学校全体として「総合的な学習」に組織的に取り組み、指導計画や指導体制及び実施状況について点検・評価することが求められた。

この2008年の改訂の動きに呼応するかのように、各学校で「総合的な学習」のカリキュラムが形成されていくことでその目的や意義が浸透し、子どもや教師の意識や行動を容容させていった。

川村ら（2010）は、改定の前後の2005年と2009年に公立小・中学校とそこに勤務している教員に対するインパクト調査を行い、「総合的な学習」が子ども、教師、学校、地域社会に対してどんな影響を与えたのかについて、約5年間の変化をまとめている。

教員調査では、子どもの変化について「学習意欲が高まった」（小：5割→7割、中：2割→4割弱）、「生きる力がついてきた」（小：5割弱→6割弱、中：3割強→5割）、教師自身の変化については「授業の力量があがった」（小：2割強→3割強、中：1割強→3割弱）、「子どもに対する見方が変わった」（小：6割→6割、中：4割強→6割弱）、学校の変化について「総合的な学習が学校により効果や影響がある」（小：3割→5割、中：2割→4割）、地域社会の変化について「地域社会により効果や影響をもたらしている」（小：6割弱→6割強、中：4割強→6割）という結果から、川村らは「『総合的な学習』は5年以上の月日を経て学校組織内に組み込まれ定着してきていると同時に、子ども、教師、学校、地域社会に対してポジティブな効果を次第にもたらしてきていることがわかる。」とまとめている。

こうした成果がみられる中で、「総合的な学習」のテーマやその決定方法の学校調査では、重点的に取り上げられるテーマがはっきりしてきていること、そしてテーマの決定については「学級担任と子どもでの話し合い」「子ども同士で

の話し合い」が減少してきているが「教師全員」「総合的な学習」に関する委員会」「学年会での話し合い」は変化がないことから、川村らは「重点的に取り上げられるテーマは、小・中学校とともに特定のテーマに絞られてきており、そのテーマを決定の自由度が低くなっていることがわかる。」と述べている。テーマ決定の自由度の低下は、子どもや学級担任の思いが反映されにくくなった結果であり、「総合的な学習」のパターン化に向かう表れであると考えられる。

原子（2013）も「総合的な学習」について、「パターン化されたものとして学校組織内に定着してきている。このことは、個々の教員によるテーマや教育方法についての判断や、毎回検討しなければならない子ども達の意向を取り入れる必要が少なくなるため、導入初期よりも教員たちの負担が軽くなり、また、教員によって『総合的な学習』の実践の質に極端な差異が出にくい環境を生み出すと推察される。しかし、『総合的な学習』がパターン化されていくことは、子どもと話し合ってテーマを決定し、その時々に応じた多様な学習方法を取り入れて、『総合的な学習』の実践を行っていききたい教員たちにとっては、自らの専門性を発揮することができにくい状況が形成されつつあることも意味する。」と述べている。

こうしたパターン化に関する教員の意識は、2010年のベネッセ教育総合研究所が行った第5回学習指導基本調査においても垣間見ることができる。小学校教員に行った「現在、力を入れて研究している教科・領域」という質問の中で、「総合的な学習」と答えた教員の割合は、07年調査5.0%から10年調査1.9%と大幅に減少している。この結果に対して、「『総合的な学習』は多くの学校ではすでにカリキュラムができていないこと」「時数が減っていること」がその背景にあるのではないかと分析されている。

具体的な学校現場の事例として、秋場（2014）が山形市、鶴岡市、庄内地区の計4校（A校B校C校D校）、71名の教員に行ったアンケート調査がある。この調査では、「次年度に活動の申し送りする」割合はA校92%・B校96%・C校80%・D校100%、「前年度と同じ活動をする」割合はA校96%・B校92%・C校80%・D校89%といずれも高い値を示している。秋場は「次年度への申し送りや前年度と同様の活動をするに関しては、高い割合で同じ活動がなされていることが分かった。」と述べている。相川が2018年に赴任した名古屋市立白鳥小学校でも同様に、少なくとも2012年から「総合的な学習」の学年のテーマは変更されず、同じ外部講師に依頼し、ほぼ同じ活動を繰り返すパターン化が行われていたことから、多くの学校でパターン化が進められていると推察される。

そして、2018年の学習指導要領の改訂では、「総合的な学習」も3つの柱により目標が明確化され、探究的な学習の過程の一層の充実を図り、各教科等で育成する資質・能力を相

互に関連付けることなどが示された。各学校では自校の教育目標を踏まえて「総合的な学習」の目標が設定され、その目標を実現するための探究課題が設定され、「総合的な学習」の全体計画・年間指導計画・単元計画が定められることになった。新学習指導要領により、「総合的な学習」は理念や意義がさらに明確化し、各学校の「総合的な学習」のカリキュラムはより強固なものへとようになっていくだろう。そして、パターン化がさらに進むのではないかと危惧されるのである。

佐藤（2019）も「新学習指導要領において総合的な学習の意義がより明確に示されても、それが本来の目的（児童生徒が課題を発見し、探究し、表現するという学習を組織する時間）での運用を広げ徹底するための処方箋にはならない可能性が示唆されるのである。」（下線は筆者、カッコ内の文言は佐藤の表記を引用）というパターン化の危険について、これまでの「総合的な学習」の運用の変遷を基に述べている。

3.3 「総合的な学習」のパターン化の要因

では、教科書がない「総合的な学習」がどうしてパターン化していくのかについて、主な要因と付随する要因の2点に分けて述べる。

主な要因としては、これまで述べてきたように、「総合的な学習」の指導は、他の教科指導にはない教員の力量が求められるからである。

そもそも「総合的な学習」は、教科書もない、テーマも指導方法も自由という中でスタートした。豊富な経験と高い指導力をもつ教員でなければ、十分な成果をあげることはおろか、単元をつくることも難しい。そのため、これまでの意識調査にみられるように現在でも多くの教員が「総合的な学習」の指導に苦手意識や負担感をもっている。こうした教員の苦手意識や負担感を解消していく有効な手立てが、学習のパターン化と言えるかと考える。

村井（2017）は、小学校の教師を対象に「総合的な学習」に対する質問紙調査（2014年）と聞き取り調査（2015年）を実施し、質問紙調査では「『総合的な学習』の指導は好きか」の質問に対し、「とても好き」または「まあまあ好き」と回答した教師を『肯定的な群』として解釈、また「あまり好きでない」または「まったく好きでない」と回答した教師を『否定的な群』として解釈し、回答した教師の意識を大まかにまとめて2つの群として意識調査を行った。その結果から「総合的な学習」の展開上の留意点を示唆し、「5.3. 今後の展望」の中で『否定的な群』の悩みへの改善方法として次のように述べている。『「単元計画を立てるのが難しい」』『見通しを持つことができない』などの悩みについては、毎年度、担任によって新たな計画を立てるのではなく、学校として複数年利用可能な単元計画を作成しておくことによって負担軽減につながると思われる。』『「教材研究が十分に出来ない」』『指導法が分からない』』『授業の進め方が難しい』などの悩みについ

ては、単元計画をもとに学習が展開される中で記録や成果物を保存し、次年度に引き継ぐことによって対応できると思われる。」「学校外での活動や施設への訪問、ゲストティーチャーの招聘などは単元計画に連絡先や施設情報などを記載しておくことで、準備時間の軽減につながると思われる。」というように、学校が計画を立てていくこと、前年度までの学習活動を参考にしていくことが大切であるとしている。前述の原子（2013）もパターン化のメリットとして、「個々の教員によるテーマや教育方法についての判断や、毎回検討しなければならない子ども達の意向を取り入れる必要が少なくなるため、導入初期よりも教員たちの負担が軽くなり、また、教員によって『総合的な学習』の実践の質に極端な差異が出にくい環境を生み出すと推察される。」と述べている。また、前述の秋場が行った調査でも「次年への申し送りや前年度と同様の活動をするに関しては、高い割合で同じ活動」がされていた。こうしたことから、「総合的な学習」に求められる教員の力量を補完していくためには、パターン化は必要な対策であり、特に教員の多忙化が問題となっている今日、パターン化は必然とも言える。

表1. 総合的な学習における課題別実施状況（校数）

課 題		年 度	
		2019	2020
横 断 的 ・ 総 合 的 な 課 題	国際理解	275	242
	情報	503	477
	環境	443	418
	福祉・健康	384	351
	その他	109	118
児童の興味・関心に基づく課題		509	477
地域や学校の特色に応じた課題		572	545
その他		34	11

続いて、付随する要因についてである。それは、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う活動の制限である。表1は、名古屋市立小学校が「総合的な学習」で取り上げた課題別の実施校数を2019年度と2020年度で比較したものであるが、どの課題も減少していることが分かる。課題（テーマ）の減少の要因としては、テーマが固定されたり、削減されたりしたことが推察できる。また、表2を見てわかるようにゲストティーチャーとして招かれる外部講師も大幅に減少している。外部講師の減少は、外部の人が校内に入ることが制限されたことが要因であると考えられる。コロナ禍において、外部との連携が不可欠である「総合的な学習」はこれまでよりもさらに制限された活動になり、これまでの単元をより良いものへとリニューアルするような環境にはなりにくく、「制限を受けた」パターン化が進んでいると考える。

表2. 総合的な学習における外部講師数（人）

外部講師	年度	
	2019	2020
有償外部講師	1,837	875
無償外部講師	2,390	1,255
合計	4,227	2,130

3.4 「総合的な学習」の見直し（リニューアル）

ここまで、「総合的な学習」は2008年の改訂以降、その意義が明確化され、各学校では計画的に指導が行えるようにカリキュラム作りが進められる一方で、計画通りのパターン化された探究的な学習が行われていくこと、つまり前年度と同様の活動が行われていくことへの危惧について述べてきた。そして、教員の多忙化や新型コロナウイルスの拡大により、それは危惧から確信へと高まってきている。

佐藤（2019）も新学習指導要領のもとでの現在の「総合的な学習」のあり方を懸念しており、『『総合的な学習の時間』を本来の目的で運用するには、すなわち児童生徒が課題を発見し、探究し、表現するという学習を組織する時間として十全に機能させるには、より広い視点において総合的な学習のあり方を捉え直し、『総合的な学習の時間』をとらえる必要がある。』と述べている。

今一度、「総合的な学習」の本来の目的である、児童自らが探究的学習を進めていくために、どのように「総合的な学習」を見直していったらよいかを考え、具体的な試みを行っていく必要がある。

4. 名古屋市立白鳥小学校での取り組み

4.1 名古屋市立白鳥小学校のパターン化

白鳥小学校は、2020年度時点で学級数16、児童数400余名の中規模の学校である。学校区内に「熱田神宮」「七里の渡し跡」など古くから周辺は人や物が行き交う交通の要所とし

て発展した。学校の西には堀川（名古屋城の建設の資材を運搬するために掘られた人工の川）、東には新堀川（「精進川」改修に伴い明治44年に名称変更）が流れ、大きな工場も近年まで複数立地していた。現在は地下鉄が二駅、JR、名鉄の主要な駅があり、国道1号、19号が交差し利便性が高く、ここ数年マンションが増加し、児童数は微増傾向にある。

こうした地域環境の特性を生かし、これまでは3年生で「地域の人々の暮らし」「地域の文化・伝統」、4年生で「環境」「福祉」、5年生で「防災」、6年生で「地域の歴史」を探究課題として「総合的な学習」を行っていた。少なくとも2012年からその学年で学ぶテーマは固定されており、ゲストティーチャーとして招かれる人も毎年決まっているなど、パターン化されていた。したがって、教員は「総合的な学習」を行うにあたり、まず前年度にどのようなことをやってきたのかを確認し、ゲストティーチャーと日程を調整し、その日程に合わせて「総合的な学習」の授業を進めていくという流れであった。子どもたちは、テーマに沿って調べたりまとめたりするわけであるが、児童が主体的に、自ら強い課題意識をもって探究していくというより、教師のお膳立てにより、課題を設定し、調べ、まとめるという探究的な学習過程を経る「総合的な学習」であったと言える。

4.2 「総合的な学習」の見直しのための地盤づくり

「総合的な学習」のパターン化を見直していくためには、カリキュラム・マネジメントが当然必要である。2019年度より「学校教育目標」を新たに設定するとともに、教員を3部会・4チームに分け、それぞれにミッションを課し、カリキュラム・マネジメントを推進していった。「総合的な学習」に関しては“総合的な学習部会”が中心となり、これまでの取り組みの成果と課題を洗い出し「言われたこと、指示されたことはきちんと行う」という児童の実態に満足せず、子ども自らが主体性を前面に発揮できるような「総合的な学習」を創っていきたいというリニューアルプランを目指す子ども

表3. 令和2年度 探究プロジェクトと探究の内容

探究プロジェクト (課題テーマ)	探究の内容
①ようこそ！世界の〇〇 (食育・国際理解)	世界の食べ物、文化、建築物などについて疑問をもち、調べる活動・実習などを通して解決する。様々な国々の文化や特色を考える。
②レッツ・エンジョイ・イングリッシュ(国際理解)	外国の人に熱田のことを英語で紹介するためには、どのような調査やスキルが必要かを多角的に考えていく。
③PR! 白鳥(情報)	熱田を元気にするために、PR方法を考え、実行していく。こうした活動から発信する力や情報モラルなどを学ぶ。
④白鳥音楽隊(福祉)	「音楽を通して、誰に何を伝えることができるのだろうか」という課題から、地域の様々な人々のことを考えた演奏のあり方を考え、実際に演奏活動を行う。
⑤堀川探偵局(歴史・環境)	学区に流れる堀川について疑問に思ったことを、調査・見学を通して、堀川から地域を見つめていく。
⑥開設！白鳥避難所(防災)	大きな災害が起きた時に、どうすれば助かるのか、自分たちに何かできることはないかなど、防災に関する理解を深めていく。

の姿と教員の願いという形で次のように提案した。

〈キーワード〉 楽しい 自ら進んで学ぶ 探究活動
 「火曜日が一番好き。だって、『総合』があるから」「次回まで待てないな。先に家で調べておこう」。学校に来ることが楽しみで仕方がない。知りたいこと、やりたいことを自分で見つけて、行動していく。子どもが目を輝かせて探究活動を楽しむ姿を総合的な学習の中で発揮させたい。そのために、教職員が一丸となって「総合的な学習の重点」を意識して実施していく。

4.3 子どもの側に立った「総合的な学習」

子どもが目を輝かせて探究活動を楽しむ「総合的な学習」にしていくために、まず子どもたちの探究心に火を付けることが重要である。そこで、これまでは学年単位で「総合的な学習」のテーマを決めて行ってきたが、子ども自らが課題を見つけていくために、興味・関心の高いテーマを選択させていくことが望ましいと考え、テーマを決めていく手順を次のような形に変更した。

- ①子どもたちに白鳥校区内にある様々な課題を8つ提示し、その中で子どもの興味・関心が高いものの6つに絞る。
- ②4～6年の6人の担任が相談し、絞られた6つの課題から自分が担当したいテーマを選択し、その探究の内容を構想する。
- ③子どもたちが、オリエンテーションを受け、自分が取り組みたいテーマを選択する。

テーマは、前頁の表3にあるように、現代的な諸課題に対応する課題、地域や学校の特色に応じた課題、自分の興味・関心に基づく課題などの観点から6つに決定した。

プロジェクトは、学年単位でなく4～6年の縦割りにして活動していくこととした。これにより、子どもたちの選択の幅が大きく広がるというメリットが生まれ、そして異学年で取り組むことで、学級・学年で普段活躍できない子どもの活躍の場が広がるというメリットが生まれるという考えである。

4.4 教員の意識を踏まえた「総合的な学習」をリニューアルしていく上で

児童主体の「総合的な学習」をリニューアルしていく上でどんな点を留意していく必要があるのかを整理したい。

一点目は、教員の興味・関心の高さの問題である。村井(2017)は、「『肯定的な群』(「総合的な学習の指導は好きか」の質問に対し、「とても好き」または「まあまあ好き」と回答した教師)において特徴的なことは、教科の学習と関連させた総合的な学習を児童が能動的に行わせるだけでなく、教師が自ら計画した学習活動を教師自身も楽しんで行っているということが挙げられる。(カッコ内は筆者が村井の文から引用)」「教師自身が『楽しい』という意識を持ちながら児童と共に課題を追究していることが、児童主体の総合的な学習

の展開を推進して行くための大きな要因であると思われる。」と述べている。教師が楽しみながら「総合的な学習」を指導することは、探究的な学習の楽しさを教師の姿から子どもたちに示すことができる。また、子どもたちの探究活動の発展性を考えた場合、指導者自身が興味・関心をもち、専門的な知識を有していることはとても重要となる。そこで、先に挙げた6つのプロジェクトの選択については、4年生以上の担任が相談し自らが興味・関心が高いプロジェクトに関わることとした。当初は、これまでの「総合的な学習」の単元を、子どもの興味・関心が高まり、自ら課題を発見できるようにリニューアル(既存の単元を基に修正を加える)するレベルで考えていたが、蓋を開けると全く新しいニュー単元(表3の①②④⑥)が子どもに示されていたところに、教員の強い思いが感じられた。

二点目は、「総合的な学習」の指導に求められる教員の力量不足に対する補完である。村井(2016)は、小学校教師を対象に総合的な学習における力量についてのアンケート調査を行い、「総合的な学習」を展開していく上で必要される力量を定義し、教師自身が自らの力量をどうとらえているのかを調査している。その結果、「概ね身に付いていると意識している教師の力量は学習状況対処力(児童の学習状況に合わせていろいろと助言を行う力)と学習状況把握力(学習が展開・進行する過程で学習状況を把握する力)であり、あまり身に付いていないと意識している教師の力量は単元設計力(単元計画を立てたり学習指導案を作成したりする力)、ICT環境設定力(課題を調べたり、結果をまとめたりするためにICT環境を整えて実践する力)、人的環境設定力(外部の講師を学校に招くために講師に交渉したり打ち合わせしたりするなどのコーディネート力)であることが分かった。(カッコ内は筆者が村井の文から引用)」と述べており、特に「若手の教師は経験を積みながらコーディネート力を備えていく必要があることの示唆が得られた」と合わせて述べている。そこで、「総合的な学習」のリニューアルにあたっては、村井のいう「単元設計力」「ICT環境設定力」「人的環境設定力」の不足については、「総合的な学習」の単元を一から創り上げたという経験がほとんどない若手教員を中心に学校の組織をあげて支援していく。例えば、ICT環境設定力については、ICT活用の経験値が高い校務主任が相談の窓口となり、若手教員が最も不足しがちとされるコーディネート力の補完については、教頭が外部との連絡の窓口として機能するようにした。

三つ目は、担当教員が孤立しないように教員間の協働性を高め、情報を交流する必然性を与えることである。4年から6年までの縦割りでプロジェクトを組むことで、これまでの学年間の相談だけでなく、他学年の担任とも情報交換する必要が生まれ、協働する対象が増えた。さらに、4年生以上の6人の担任は職員室内の机を近づけ、移動しなくてもいつで

も相談できるように配置の工夫も行った。また、6つのプロジェクトに担当教員以外に低学年担任及び担任を持たない教員を組み入れ、相談体制を取れるようにした。

四つ目は、時間の不足への対応である。これまでの調査からも、「総合的な学習」の指導は時間がかかるという調査結果が出ている。全く新しい単元を構想するのはもちろんのこと、リニューアルするだけでも時間が必要となる。そこで、主に若手教員がこれまで関わってきた授業時間外の部活動指導を民間に委ねた。これは教育委員会の施策であるが、いち早く試行校に応募し実行していくことができた。また、高学年に「教科担任制」を導入し、専門性を生かすとともに教材研究の時間の短縮を図るために、教科担任制が実施可能なように教員の学年配置を計画的に進めた。具体的には、国語・(算数一習熟度別授業のため担任でない教員になることもある)・道徳以外は、教科担任が行う体制を整えた。

4.5 リニューアルされた「総合的な学習」の実際

4.5.1 児童の取り組み

6人の教員が年度当初立てた計画は、緊急事態宣言発令により開始が6月にずれ込んだり、外部講師を呼べない・学校外へ出られない等の制約を受けたりした。例えば、①ようこそ！世界の〇〇(食育・国際理解)は、外国の料理を作る調理実習ができなくなった。②レッツ・エンジョイ・イングリッシュ(国際理解)は、英語を駆使して説明しようと計画していた熱田神宮を訪れる外国人がいなくなった。④白鳥音楽隊(福祉)は、幼稚園・保育園、介護施設等へ訪問できなくなった。⑥開設！白鳥避難所(防災)は、大規模な防災訓練が中止された。このように、活動の根幹にかかわる部分が多大な影響を受けた。

こうした中でも、子どもたちの探究心を満たせるように、新たな活動を行ったり、新しいゲストティーチャーを探し出したりするなど、学校全体で「総合的な学習」のリニューアルを図った。その結果、図1のように、「総合的な学習」が楽しくなった(「とてもなった」「なった」の合計)児童は93.6%で、昨年度に比べて約30%増加した。

また、今回の実践の中で次のような子どもの姿も見られた。「②レッツ・エンジョイ・イングリッシュ」のプロジェクトには、英語への興味・関心が高く、英語を使って自分たちの

地域の様子を紹介したいと思う児童が集まった。外国籍で日本語指導が必要な4年生の女児2名もこのプロジェクトを希望し、6年生の帰国児童・男児と一緒に日本と海外の学校の様子の違いを発信したいと3人グループを作った。6年生の男児は日本語と英語を理解しており、4年生から頼りにされリーダーとして探究学習を進める姿が見られた。また、4年の女児も普段は授業中にほとんど発言しないが、英語を使うことが目的であり、英語で紹介することが目標であるので、6年生を頼りながらも英語を楽しく、誇らしげに話す姿が見られた。

4.5.2 教員の取り組み

単元をリニューアルしていくのは、大変であるが、新型コロナウイルス感染症の拡大による影響が、さらに難しいものにしていった。

これまででは、計画された単元の指導計画を基に進めていく流れから、今日の子どもたちの探究の結果に合わせて、次週の準備をしていく流れに変わっていった。当初は、子どもの取り組む方向が読み切れず、子どもたちが「火曜日が楽しみ」と話す反面、中堅の教員でも「火曜日が来るのが大変」と漏らしていた。しかし、活動が軌道に乗り始めるとそれぞれ自分の得意な分野で子どもたちの活動を広げていった。活動の概要は表4のとおりである。

学校として取り組んだ「総合的な学習」のリニューアルであるが、②③⑥は20代の教員が担当し、それぞれの教員が自分らしさを発揮した。②では子どもたちが英語でプレゼンテーションを行うにあたって、名古屋市のグローバル・エデュケーションセンターに出かけ、外国の方に子どもたちの英語を聴いてもらったり、アドバイスをもらったりする活動を取り入れた。③では、SNSのインスタグラムで発信するために、名古屋市の情報化推進課に申請し許可を得て、子どもたちが学校のネットワークを活用して発信できるようにした。⑥では、何度も外部講師を招き、子どもたちの探究心を満たせるようにした。若手教員の自由な発想が活動に生かされている。

一方で、負担感として気になる時間の確保については、「総合的な学習」のリニューアルに要した時間のみを比較ができないため、令和元年度と2年度の勤務時間外の在校時間を比べてみた。②⑥の教員は令和2年度からの赴任者なので除外

図1. 昨年度より、「総合的な学習」が楽しくなった児童の割合(4~6年生)

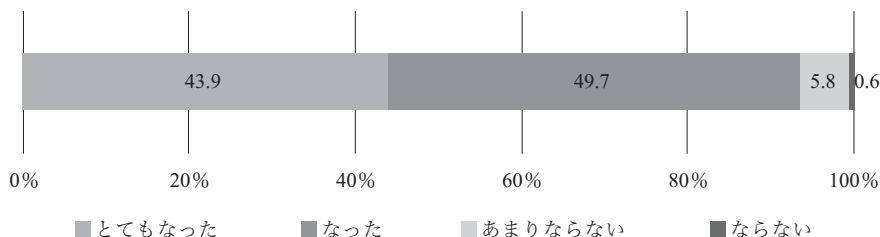


表4. 令和2年度 探究プロジェクトと活動の概要

探究プロジェクト (課題テーマ)	活動の概要
①ようこそ！世界の〇〇 (食育・国際理解)	「世界のチップス」を食べる活動から世界の食べ物に興味・関心をもち、続いて乳製品の生産が盛んな国はどこか調べていった。国の特色や文化の違いをまとめた。
②レッツ・エンジョイ・イングリッシュ(国際理解)	熱田のお店、歴史、自然、交通、学校のグループに分かれ、地域の方々に協力してもらいながら活動を進めた。英語で地域を紹介し、その成果を店や地下鉄の駅などに置いてもらい、発信した。
③PR! 白鳥 (情報)	食べ物、町並みのグループに分かれて、SNS に投稿するための情報を、町おこし団体「宮宿会」に協力してもらい、インスタグラムで調べたことを発信していった。
④白鳥音楽隊 (福祉)	音楽を伝える相手を、「子ども」「お年寄り」「今がんばっている人(医療従事者)」に焦点を当てて、チームに分かれて曲選びから演奏まで、主体的に取り組み、DVD に映像を収め、関係した施設に送り、発信した。
⑤堀川探偵局(歴史・環境)	歴史、自然、生き物、環境、町並みのグループに分かれて、堀川の不思議について、「堀川まちネット」に協力していただきながら調べた。それぞれの視点から、堀川の特色をまとめ、壁新聞にして発信した。
⑥開設！白鳥避難所(防災)	食べ物や飲み物、衣類など避難する時に必要なものを調べ、熱田区役所の総務課の方、熱田消防署の方を招きし、調べる中で出た疑問に答えてもらい、防災の大切さを壁新聞にして発信した。

し、①③④⑤の教員の月平均で比較すると次のようであった。

① 22.2時間→13.3時間 ③ 28.5時間→24.7時間

④ 24.8時間→33.4時間 ⑤ 21.3時間→30.0時間

4人の合算 24.2時間→25.3時間

減っている教員もいれば、増えている教員もいるので、4人の合算で比較すると月平均で1時間程度、1日に換算すると3分程度増えていた。それぞれの教員が他の校務も担っていたり、校外の仕事に取り組んだりしているので一概に比較は難しいが、「総合的な学習」のリニューアルを行ったことを考えると時間的な負担は最小限に抑えられたと考える。次

年度は、この取り組みが土台となるため負担は軽減されると考えられる。

4.5.3 広がっていく「総合的な学習」の見直し

教員が取り組んだ6つのプロジェクトとは別に、教頭である左近(2021)は6年生で地域教材を新たに開発し、国語科と社会科の「見方・考え方」を働かせた「総合的な学習」の単元「卒業ミッション 自分らしい生き方について考えよう」を創った。この単元は、白鳥小学校の前身である千竈小学校の校長を務め、陸軍大将でもあった「秋山好古」の探究を行う中で、子どもたちにとって身近な人物の生き方の中に価値

表5. 令和3年度 白鳥小学校の「総合的な学習」の単元一覧

令和3年度 「総合的な学習の時間」の探究課題と学習活動					
3年	4年	課題	5年	6年	課題
たんけん！発見！白鳥の町(歴史) 探究① 白鳥学区の名所に着目し、地域の人の思いを探る。 探究② 白鳥学区や白鳥小学校の歴史を調べ、学区歴史地図を作成する。		町づくり	PR! 白鳥 探究① 東海道の歴史や伊勢神宮とのつながりといった宮宿の役割や特徴を探る。 探究② 熱田の魅力を多くの人に伝える方法を考え、PR 動画やプレゼンを発信する。		地域経済情報
たんけん！発見！白鳥の町(お祭) 探究① 白鳥学区の名所に着目し、地域の人の思いを探る。 探究② 熱田祭りに関わるその他の祭りについて、歴史、関わる人、地域の人の願いを探る。			届け！アートの力 探究① 地域の魅力について調べ、アートの力で地域の魅力を伝えるプロジェクトを考案する。 探究② 地域の魅力を伝える展示やスタンプラリーなど、考案した企画について具体的に進める。		
体のヒミツ！たんていだん 探究① 体のふしぎについて着目し、体のしくみについて探る。 探究② 体のしくみについて分かったことから、健康な生活を送るにはどうすればよいか探る。		健康	We are the world! 探究① 日本と世界の文化の違いについて、様々な資料を活用して探る。 探究② 世界の抱える課題に目を向け、自分たちができることは何かを考え、提案する。		国際理解
守りぬけ！みんなのいのち 探究① 東日本大震災における防災や新型コロナウイルスの感染症予防について調べる。 探究② 「防災・防犯・防疫」の3つのテーマから興味・関心のあることについて探る。		防災	つくろう！新献立 探究① 熱田区や白鳥学区の食文化を探る。 探究② 新献立を考えるとともに、新献立を実現するための方法を探る。		食

を発見し、卒業前の子どもたちが自己の生き方を考えること、母校を愛し続け、未来の新たな地域を想像する一視点を持つことをねらったものである。この実践では、秋山好古の郷里である愛媛県松山市の松山市立東雲小学校と交流の場を設け、秋山好古について学んだことや互いの校区の特色について伝え合う活動も行った。

学校の教員の内なるエネルギーが表出し始め、令和3年度は表5にまとめたとおり、栄養教諭が「つくろう！新献立」、養護教諭が「体のヒミツ！たんていだん」、5年教諭が「届け！アートの手」という新しい単元を創り、探究学習を進めている。また、昨年度行われていた「開設！白鳥避難所」は「守りぬけ！みんなのいのち」に、「ようこそ！世界の〇〇」は「We are the world！」に名称を変えリニューアルされている。さらに、グループ内での発達段階の差を小さくすることで児童に適した探究のプロセスが行えるという点と3年生も選択の幅が持てるようにという考えから、令和3年度は3・4年生、5・6年生で異学年のグループを編成し、それぞれ4つの探究テーマから児童が自分の興味・関心の高いテーマに主体的に取り組めるように変更されている。白鳥小学校では、「総合的な学習」は固定されたものではなく、探究テーマのみならず、学習方法の見直しも進められている。目の前の子どものための「総合的な学習」になってきているのである。

5. おわりに

2008年の学習指導要領の改訂以降、「総合的な学習」の教育課程が各学校で整備される一方で、パターン化が進んでいくことが危惧された。実際に、前年と同じ学習活動を行う教員もみられ、2017年の学習指導要領の改訂の下でますますその危険性が高まっていくと予想された。そこで、「総合的な学習」が本来の目的である子どもたち自らが課題を持ち、探究的な学習を進めていけるように、単元のリニューアルを図っていった。

その際に、「総合的な学習」が創設時から現在に至るまでの教員の意識に着目し、「負担がかからない」配慮をしていくことで、総合的な学習はパターン化から脱却し、若手もベテランも、そしてすべての教員がより良い「総合的な学習」を生み出そうと動き始めた。

現在、相川は「総合的な学習」の指導法の授業を担当している。その中で、グループ毎に仮想の小学校の全体計画を考える活動を取り入れている。個々の学生はそれぞれが子どもたちの探究心をくすぐるような単元計画を2つ考えてくることにしたが、提出された単元の活動を見ると、この授業で取り上げた実践例の焼き直しや学生自身が小中学生のころに体験したもの、社会科の授業内容と重なるものばかりであった。45名の学生が考えた90の単元のうち、オリジナリティーを感じた単元は1例のみであった。すでに、パターン化の兆候

が見られるわけであるが、学生が持っている自由な発想を引き出し、発想の豊かな教員を育成していくことを目指していると考えている。

謝 辞

平成30年度より赴任した名古屋市立白鳥小学校の教職員の方々には、新学習指導要領の改訂に伴うカリキュラム・マネジメントに一丸となって取り組んでいただき感謝申し上げます。特に、単元のリニューアルに取り組んでいただいた沼山泰幸先生・菊池有加莉先生・佐野雄一先生・佐々木めぐみ先生・内藤智裕先生（「総合的な学習部会」の取りまとめ役）・鷲見昌彦先生、そして実務的な部分で時間割編成や教育委員会への報告書等の作成にご尽力いただいた教務主任の村瀬啓亮先生にはあらためて厚くお礼申し上げます。

引用文献

- 愛知教育大学附属名古屋小学校（2000）明日にはばたく子を育てる総合学習実践例集—新教育課程の核に位置付けて—。明治図書，2000年2月。
- 秋場淳（2014）総合的な学習における教師の意識に関する考察。山形大学大学院教育実践研究科年報，5：260-263。
- 川村光・紅林伸幸・越智康詞（2010）「総合的な学習の時間」の10年間—学校は変わったか—。日本教育学会第69回大会大会研究発表要項，pp. 382-383。
- 佐藤知条（2019）「総合的な学習の時間」の扱いの変遷に見るこれからの課題。静岡産業大学スポーツ教育研究所スポーツと人間，3(2)：99-104。
- 左近妙子（2021）学校にルーツをもつ偉人をモデルに 自分らしい生き方を探究する総合的な学習の時間—「坂の上の雲」の秋山好古の行き方を例に—。「楽しく深い学び」を創る国語科授業研究会紀要，4：38-52。
- 中央教育審議会（2003）初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について（答申）第2章3「総合的な学習の時間」の一層の充実，https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11093886/www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/03100701/007.htm（2021年11月30日閲覧可能）。
- 名古屋市立城西小学校（2001）平成13年度 名古屋市立城西小学校 総合的な学習の時間教育課程。
- 原子純（2013）子どもの育ちを支える学び—幼児期の「遊び」から小学校「総合的な学習」へ—。共栄大学研究論集，11：179-198。
- ベネッセ教育総合研究所（2002）第3回学習指導基本調査 [2002年] <https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=3249>（2021年11月30日閲覧可能）。

- ベネッセ教育総合研究所 (2005) 平成16・17年度文部科学省委託調査「義務教育に関する意識調査」報告書 [2005年] <https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=3320> (2021年11月30日閲覧可能).
- ベネッセ教育総合研究所 (2007) 第4回学習指導基本調査 [2007年] <https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=3247> (2021年11月30日閲覧可能).
- ベネッセ教育総合研究所 (2010) 第5回学習指導基本調査 (小学校・中学校版) [2010年] <https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=3243> (2021年11月30日閲覧可能).
- 村井万寿夫 (2016) 総合的な学習における教師の力量に対する自己意識について. 教育メディア研究, 22(2) : 13-19.
- 村井万寿夫 (2015) 総合的な学習の展開を阻害する要因についての検討(2). 金沢星稜大学人間科学研究, 9(1) : 25-30.
- 村井万寿夫 (2017) 総合的な学習の指導にあたる教師の意識に関する研究—金沢市の小学校教師を対象とした調査を手掛かりに—. 日本教科教育学会誌, 40(2) : 31-42.
- 文部科学省 (1998) 小学校学習指導要領 (平成10年12月告示) 第1章総則第3 総合的な学習の時間の取扱い, https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/cs/1319941.htm (2021年11月30日閲覧可能).
- 文部科学省 (2005) 小学校学習指導要領一部改正 (平成15年12月改正) 第1章総則第3 総合的な学習の時間の取扱い, <https://erid.nier.go.jp/files/COFS/h15e/chap1.htm> (2021年11月30日閲覧可能).
- 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領 (平成20年3月告示) 第5章 総合的な学習の時間, <https://erid.nier.go.jp/files/COFS/h19e/chap5.htm> (2021年11月30日閲覧可能).
- 文部科学省 (2017) 小学校学習指導要領 (平成29年3月告示) 第5章 総合的な学習の時間.
- 文部科学省 (2017) 小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 総合的な学習編 (平成30年2月), 東洋館出版社.